

沖

5  
2015

俳句雑誌[おき]



# 走り尽く

能村 研三

## 書齋訪問

先日、俳句総合誌の企画で「書齋訪問」という取材があった。こうした企画は普段から整理のおぼつかない多忙な俳人にとっては悩ましいものである。編集者からは、「ありのままでも良いですよ」と言われたものの、ある程度の書庫と書棚の整理をすることにした。幸い昨年の夏から書齋の大幅な改造に着手し、畳の和室において座卓で仕事をしていたものを全てフローリングにした。私の体格にあわせ特別に挑えた杉の木の座卓も、知り合いの大工に相談したところ、これにデザインが合うような脚をつけてくれたので、これを再利用している。

多忙を極めていると、書棚も横積みの本が幾重にも重なり、結局は積読の状況になり何がどこにあるかわからないままになってしまう。

我が家には、父の蔵書のための書

活版の印字の重み 黄砂降る

一艇を坦ぐ 春嶺 仰ぎ 見て

一睡のあとは 春星 うる みたる

朧夜をブルートレイン 走り 尽く

助手席に粗畳みせる春の服

陽炎や仕来り違ふ向かふ岸

口中におぼろをまとふ湯葉づくし

使はずの文房四宝黄砂降る

家人とは別の酒酌む花の夜

走り根に日の斑が揺らぐ愛鳥日

庫が二カ所あり、これに加えて沖のバックナンバーをしまっておく専用書庫がある。これも次女の麻衣が時間をみつけては、バックナンバーの整理をしてくれたので、古い号の「沖」での調べものがし易くなった。

以前林翔先生の書齋を訪ねた時、先生の几帳面さもあって、作家別に句集、著作が纏められ、これも五十音順に並べてあるのを拝見したことがあり、このように書庫は整理していくものだと教えていただいたことを覚えている。

蔵書というものも、ただ仕舞っておくだけでは、何の意味もなさず空間の無駄遣いになってしまうことは明らかなことなのだが、これが日常的にスムーズに出来ないことが悩ましいことである。

今回の書齋訪問の取材は、書庫を整理する良いきっかけになった。これから少しずつ時間をかけて林翔先生のような書齋整理をしていきたいと思っている。

# 蒼茫集



愚直に

千田

敬

桃咲いて誕生会のナポリタン  
このところ涙湧かずよ初桜

力づく

安居正浩

歳時記を愚直に繰りて余寒なほ  
啓蟄や釘ひとつをはづしをり  
棧橋は見送るところ春夕焼  
木の芽山つくばは路行一旬仰ぐといふは背筋伸び  
科学とは地の塩なれど芽は花に  
而して宇宙遊泳春の夢

歩幅 辻美奈子

踏青のこころ鎮めの歩幅かな  
探梅のすこし不便はよかりけり  
雨でなく雪でなくひとひらの水  
啓蟄の石ころ目覚めたがるなり

流水を押す流水の力づく  
もやもやが集まり春の山になる  
園児来て土筆の国はカーニバル  
鐘楼に時間の眠る春の昼  
春風と湖ある町を故郷とす  
旅に出て子は強くなる春休

三寒四温

菅谷たけし

湯気立てて人は淋しさ飼ひ慣らす  
菰丈をはみ出ず寒の白牡丹

三寒四温身の丈徐々に縮みけり  
さざなみに沼明け渡し鴨帰る  
芽起しの雨に浮きくる真鯉かな  
ひとの世の喜怒を遠くに桃の花

宇宙服 細川洋子

啓蟄や幾らか緩む釘の穴  
優柔を竭し北窓ひらきけり  
桃咲くや年を重ねるほど御洒落  
芽起しの雨三句ロケットの聳え立つ  
宇宙服もこもこ厚し山笑ふ  
軒裏の竹組み美しき雛の家

塩の道 矢崎すみ子

鳥帰る地に塩の道絹の道  
鳥声の靄にくぐもる牧開き  
竜天に登る硯の龍の彫  
動かざる山や五百枝に風光る

鉄瓶に湯の沸いてゐる入彼岸  
直線のうねりの松や雁帰る

ビバルデイ 内山照久

暗がりの艶めき亀の鳴く気配  
春寒し歩道の禁煙マークかな  
針穴に糸の通らぬ余寒かな  
菜の花の向かふは空と海ばかり  
茹で上がる春菜のみどりビバルデイ  
春雷や耳こそばゆき褒めことば

ごごみ歩き 千田百里

小町忌の掌にひんやりと電子辞書  
蝶にこゑありとせばこのせせらぎか  
黄楊の櫛もて春愁をほぐしけり  
鷹鳩と化し油断も隙もある夫婦  
口ケくち待機竜天に登るため  
春興や古民家ごごみ歩きして

木の芽雨 甲州千草

箸要らぬもの買ひ春に合流す  
木の芽雨団体切符配らんと  
涅槃西風ほうとロケット一周り  
木の芽雨こども電車の覆はれて  
雛覗く上り框に手をついて  
抱卵期防犯カメラ増ゆるなり

時刻表 楠原幹子

家になき大黒柱建国日  
冴返る紙ふんだん使ひ捨て  
透明な傘に音なく春の雪  
魚は氷に分厚き時刻表を買ひ  
名刺にある半農半漁あたたかし  
達観か諦観か莖立ちにけり

連翹忌 大畑善昭

痩せ猫の恋敵には負けてみず  
春荒れの三日つづきし後の星

帰りなんいざ白鳥の縞羅の列  
何にでも使ふ両の手連翹忌  
春の鳶輪の中に的しぼり切り  
見て通るのみ梟の巢のある木

春待つ指 林昭太郎

パレットに春待つ指を通しけり  
春シヨールひらりと船の人となる  
囀や両手広げて干すシート  
湯上りのやうな月揚げ猫の恋  
マヨネーズばふんと終る春の昼  
ピアノにも鍵といふもの桜冷

吊し雛 上谷昌憲

干物焼く匂ただよふ吊し雛  
吊し雛夜は引力に戯れてをり  
昨日とは違ふ潮騒吊し雛  
ホチキスに針を装填日脚伸ぶ  
下町の目抜通りを初つばめ  
おざなりの現場検証鳥雲に

桜咲きさう

遠藤真砂明

たつぷりと生きて枸杞飯日和かな  
黒北風の海の歳月東北忌  
桜咲きさう心音のあふれさう  
地球儀の先に波音春休み  
きつと見据ゑてきさらぎの男星  
晩年の花に青空ごころかな

浄め塩

藤原照子

直系の果つや深雪の家守り  
消息は施設へとのみ梅一輪  
読書とふ美味しい時間春の雪  
自らへ浄め塩ふり梅二月  
断捨離の一步春日の小抽斗  
春霞突きつくばエクスプレス号

田打ち桜

森岡正作

木洩れ日の一つ弾けて鳥の恋  
七人の敵何処にゐる目借時

農具研ぐ田打ち桜に急かされて  
フランスへ留学雛を置き去りに  
芽吹山太き餅を返しけり  
抑留を語らず逝けりミモザ咲く

夢継ぎ足して

樋口英子

八ヶ岳の風不揃ひに春来つつあり  
冬木の傷撫でて己れを律しけり  
冬の夜の夢継ぎ足して母に逢ふ  
ストーブを囲み木椅子の客となる  
話題また昭和に戻る炬燵かな  
青き踏むどこにも地雷なき青さ

さざ波のごと

秋葉雅治

余寒なほ利休鼠の湖の面  
寄せ返るさざ波のごと春愁は  
大鳥居の立つ瀬を洗ひ彼岸潮  
国道に隣る村道雪解遅々  
水垢離の僧の浴身冴返る  
初ざくらひた待つ日々の自愛かな

飛翔ごころ 望月晴美

春光や飛翔ごころに階のぼる  
蛇穴を出づ厄介な長さもて  
春一番ハンドル急に意志持てり  
筑波嶺の稜線やさし芽吹き時  
春山家大黒柱親しくて  
しかと巢を抱く裸木の枝ぢから

人の世 宮内とし子

人の世にサイエンスあり梅真白  
寝返れば宇宙まで行く春の夢  
古民家に座す春愁の置きどころ  
東風吹くや終着駅は知らぬ町  
網元の土間開け放ち吊し雛  
夫植糸し楨は大樹に月おぼる

百合鷗 鈴木良戈

夕風にそぞろ川波百合鷗  
盆梅や朝日に凝りし紅の輝り

柀挿す低き門柱星明かり  
植木市三人寄りて値を定め  
訃の知らせ受けたる朝の雪ひらひら  
斎藤惺歌氏訃報（升原美鳥さんより）  
練焼く香り夜風にまぎれをり

新雪 河口仁志

新雪を踏み月面にゐるごとし  
狐火に憑かれ愚老の独り言  
雪解川越えて富山の薬売  
目つむれば風瞪けば野火猛る  
鳥帰る家庭菜園十坪ほど  
地球とは宇宙の孤島春の月  
口跡 溯上千津

父似母似の二人遣りぬ雛の宵  
月おぼる老けてもオーラ褪せぬ人  
慰霊堂三月十日の雨けぶる  
亡き人の口跡をふと春夕焼  
わが知らぬライン飛び交ふ春の闇  
人頼まず時を待ちある余寒かな



# 潮鳴集



神々

荒井千瑛子

参道の真中神ゆく二月  
青き踏む古事記の神の一步かな  
約束のあるかに街へ三月来  
飛び立てぬ展示ロケット日の永し  
春うらら手力男立つゆるぎ石

春風

平松うさぎ

料亭の一椀に発つ春風  
春風に少女そのまま印象派  
智の神の智を開かむと春の雨  
福島忌月は朧を深めけり  
春雷の一閃巨船の腹浮かぶ

鳥の恋

大沢美智子

濤音のひとときは高し立雛  
ひかり降る沖の潮目や菜の花忌  
福耳の飛鳥大仏桃の花  
むらさきに筑波の双耳雛納  
太陽を造るてふ夢鳥の恋

児は親思ふ

中田とも子

二月礼者引き摺りさうな紙袋  
気に掛かる地軸のずれや初ひばり  
秘すれども児は親思ふ桃の花  
吾が雛男の子ばかりに見詰めらる  
春寒や原発といふ異界の火

# 沖作品



## 能村研三選

神奈川

小林 和世

立春大吉一刀彫の黒光り  
鳩一羽湖むらさきに暮れにけり  
鳩浮きて己が立ち居を確かむる  
風花や円空仏の彫に笑み  
立春のその一木のあすならう  
湧水の春の光を掬ひけり  
ひとつつつ香りを聞きて梅五輪  
本陣の大梁あらは春寒し  
白梅や大庭下駄並べあり  
春雷や母に反抗せしことも  
啓蟄やペンと手帳と好奇心  
白魚飯頬張つて地の人となる  
薬や朽ちゆく幹の叫びとも  
梅万蕾生くる力の漲れり  
リユックにはおむすび二つ下萌ゆる

千葉

竹内タカミ

市川市

本池美佐子

千葉

岡 真紗子

黙といふ饒舌もあり夜の梅  
草の芽や敗者復活する兆し  
梅の名は五郎十郎虎御前  
めらめらと地を迫り来る野焼の火  
鯉五郎料る女将の赤禪  
雪撥ねて総身震はす雄松かな  
凍星や撃ちてしまむと征きし兄  
陰日向きは立つ谿や雪解どき  
峡の灯の二つ三つ四つ初臙  
料亭の裏階段や恋雀  
雪解急海峡隔て佳き便り  
一人の世夫の年越え二月逝く  
待春や足裏のちとむづ痒き  
雛の間に吾が来し方のつくづく  
蓮如忌や今にして沁む御文章

福島

佐川三枝子

頼田 幸子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

鳩一羽湖むらさきに暮れにけり 小林 和世

鳩は湖沼や公園の池などに棲み、例えば琵琶湖は鳩の湖などと称され親しまれている。しかしめつたに地上には上がらず、水に潜っては魚や小海老、昆虫などを捕食している。目まぐるしく浮き沈みする様を眺めていても、潜った鳩が次にすぐ浮いて来るとは限らないし、長く潜っているものや直に浮いて来るものなど様々である。また浮いて来る場所も想定外の場所に出てくることもある。また「鳩鳥の」は「葛飾」にかかる枕詞で万葉集などにも詠まれている。作者は夕暮れ時紫色に暮れかかる湖にいて、鳩鳥が何度も潜っては浮き上がる瞬間を心ゆくまで観察していた。

湧水の春の光を掬ひをり 竹内タカミ

湧水というと富士山麓の柿田川や忍野八海などが有名だが、

いずれも富士山の雪解け水が地下の溶岩の間で長い年月をかけて濾過され湧水となつて噴出する。透き通つた川の底から力強く砂を巻き上げて、まるで呼吸をしているかのように次々に水が湧いてくる。その湧き方は、湧水の息遣いを聞いた気分にもなる。その透明感ほまるで春の光を掬い上げているようでもある。

啓蟄やペンと手帳と好奇心 本池美佐子

啓蟄は二十四節季の一つで三月六日頃にあたる。啓は「ひらく」、蟄は「土中で冬ごもりしている虫」を意味し、大地が暖まり冬眠していた虫が、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃を言う。まだまだ寒い時期ではあるが、俳句を作る人にとつても待ちに待った吟行シーズン、ペンと手帳を携え、好奇心を大きく膨らませ出かけることにした。

黙といふ饒舌もあり夜の梅 岡 真紗子

この句は一句一章の句として解釈した。梅が咲く頃の夜は春とはいえず、まだ寒く梅もまた白々と冴えている。「夜の梅」というと和菓子の羊羹の名を思い出すが、この菓子の名も『古今集』の〈春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠る〉から採つたらしい。闇の中に白く咲く梅の花は香を放ち闇をほんのりとした艶で包み込む。その梅の咲きようは静寂の中にも饒舌という賑やかさも垣間見ることが出来る。(以下略)